

エリトリアという国の名前は聞いたことがあると思っていたが実は錯覚していたのだ。「どこ？」と訊ねられれば「ほら、あの、バルト海沿岸の…」と答えてしまう。恥ずかしいことにエストニアやリトニアとごちゃごちゃになっていたのだ。旅行ガイドブックにも載っていないし、地図上では北アフリカのエチオピアの隣の紅海に面した国ということだけ知って乗船した。

エリトリアのマッサワ寄港前、2～3日の俄仕込みの知識によると、独立してまだ12年しか経っていないアフリカで一番若い国である。30年に及ぶエチオピアとの独立戦争後、イサイヤス大統領は「エイド(援助)はエイズ(AIDS)だ」と、援助漬けになって骨抜きにされて自立できない多くのアフリカ諸国のようになることの怖さを強調。基本政策の一つに「他国に依存しない持続可能な発展」を掲げ、諸外国からの単純な「援助」を遠ざけている。

エリトリア通貨のナクファ(NKF)は独立運動が最初に始まった北部の町の名前に由来する。通常どこの国の紙幣もその国の著名人や建造物が載っているが、ナクファは働く農民や子どもが載っている。目の不自由な人でも指で識別できるようになっている。しかし、1997年にエチオピアの通貨ブルを廃止し、ナクファが発行されたことも一因して、エチオピアとの国境付近では翌年紛争が勃発し、現在も緊張状態が続いている。

この程度の俄か勉強で上陸したエリトリアだった。朝6時マッサワ港着岸、午後1時に出港(帰船リミット正午)という僅か6時間の滞在だ。日中、日差しがあると35℃以上になるという。船の着岸地点から港のゲートまで歩いて15分ほどだが道路はでこぼこ。マッサワ港は貨物船の港だから荷を積んだトラックがひっきりなしに土ぼこりを上げて通り過ぎる。あちこち工事中でクレーン車が作業中だ。苦勞してゲートを出ると民族衣装や布のバッグなどのみやげ物の露店が数軒、店を出している。彼らはピースポートの乗船客のために首都アスマラから何時間もかけてやって来るのだそうだ。オプションツアーのラクダキャラバンのラクダも口コミで100頭ほど数日掛けて遠方から集まってくるという。

郵便局で葉書を出し、20分ほど歩いてハイレセラシェ皇帝の別荘跡に着いた。彼が冬の別荘として建てたトルコ風の豪邸だったが内戦中に砲撃を受けドーム状の屋根は砲弾で穴ぼこだらけ、壁も落ち鉄骨がむき出しになり無残な姿をさらしている。“独立のための戦い”を忘れないようにと修復せずにそ

のままの状態に残してあるという。その建物の前の広場にはコンテナがいくつも積み重ねて放置されている。その中には紛争で亡くなったエチオピアの兵士の遺体があるままになって入っているとか…。

そこから海岸沿いに15分ほど歩くと、独立戦争のとき最激戦地となったマッサワで大活躍した3台の戦車が飾られている殉教者記念公園に着く。砲弾の代わりに今は砲身から噴水が飛び出すようになっているそうだが、年間雨量20mmのマッサワでは常時水がているわけではないようだ。公園の近くから新市街へは橋が架けられて道路と鉄道線路が並行して走っている。独立戦争前まではマッサワからアスマラまで蒸気機関車が走り、紅海沿岸から首都へ物資を運ぶ重要な輸送機関だった。戦争でその運行は中止。線路は腐食し折れ曲がり荒れ果てた状態になっていた。復旧作業がこの10年で進められてきたがまだ時間が掛かりそうだという。

ところがピースポートがここへ寄港する際にはわざわざ一部区間、列車を走らせてくれるとのこと。残念ながら私は機関車乗車体験のオプションツアーには参加しなかったので、工事中の線路を歩いて新市街へ入った。朝は曇っていてそれ程暑さを感じなかったが、その頃には太陽が真上からジリジリ照りつけ汗がふき出してきた。塩田を見渡せるところまでいったがフェンスがあってそこでストップ。引き返してカフェのようなレストランのような店でコーヒーを飲んだ。とても甘いが本格的なデミタスコffeeだった。ピースポートのレストランのコーヒーにやや嫌気がさしていたのでとても美味しく感じられた。

市内では道路の一部を通行止めにして自転車レースが行われていた。日曜日だからだろうか。帰り道は暑さに耐えられずタクシーを使い港のゲートまで戻った。近くの市場でマッサワ名産の自然塩を買って帰船リミット10分前に船に戻った。まずはバーに直行。生ビールで喉を潤した。マッサワの街中ではアルコール飲料を出す店はなかった。この国の半分くらいがイスラム教だからかも…。たった6時間のエリトリア滞在中でこんな盛り過ぎの過密スケジュールだった。高い理想を掲げる“アフリカの期待の星”と思われているエリトリアだが、独立後10年を経て、道路や鉄道などのインフラ復旧がいまだ進まず課題を沢山抱えている。そんなエリトリアを駆け足で見られたことに大満足。(2005年3月6日)